

「アジアの中の日本文化」研究センター
国際シンポジウム 2018.1.20-21
要旨

次世代パネル: アジア圏文化における身体=ジェンダー

◎吳静凡（お茶の水女子大学大学院）

『腐女子』は趣味について何を語るのか——ジェンダー秩序をめぐって

本発表では、やおい・BL(男同士の恋愛物語)を好む「腐女子」に半構造化インタビューを行い、彼女たちの語りを分析し、やおい・BL 趣味をめぐる本人たちの言説とジェンダー秩序との関係について論じる。「腐女子」の趣味をめぐる言説、例えば「私は〇〇が好き」「〇〇があまり好みではない」といった発話は、語りの中でどのような意味を含んでいるのか。それらの発話はジェンダー秩序と関係しているのだろうか。関係しているとすればどのように関係しているのか。これらの間について「腐女子」の語りから回答を模索したい。

◎中山佳子（名古屋大学大学院）

老いの身体における「正常な異常性」——ドラマ「やすらぎの郷」にみる老いの身体と正しい身体の関係性

本発表では、多様な老いの姿の描出を試みた日本の帯ドラマ「やすらぎの郷」(2017)のテキスト分析を通して、本ドラマにおける老いの身体表象の持つ可能性と限界について討議する。そこでは、「《老い》とは何か」という問いに対するフェミニストたち—ボーヴォワールとフリーダンを筆頭に—の解答に対する批判的検討を加えながら、老いによってもたらされる身体の「正常な異常性」が、現代社会における正常な身体の神話と拮抗する可能性を示す。一方で、老いの身体が既存のジェンダー規範に取り込まれることで、一定の限界点を有していることも示したい。これらの議論を踏まえて、老いゆく身体に正常な身体を攪乱する契機があるか否かを議論する。

◎游書昱（名古屋大学大学院）

1960年代後半の『メンズクラブ』という場——「メンズ」とは誰のことなのか

『メンズクラブ(MEN'S CLUB)』は日本の戦後最初の男性ファッション雑誌であり、創刊当時(1954年)『男の服飾讀本』という名称だった。1963年に『メンズクラブ』へと改称され、構成も一新されて再出発をしたのだが、『男の服飾讀本』も『メンズクラブ』も、どちらも男性を読者層として想定したネーミングである。いうまでもないのだが、男性読者層を多く獲得するには、編集者は『メンズクラブ』を男性が快く読める雑誌に仕上げなければならない。男性が気楽に読むために、男らしさの言説、もしくはジェンダー規範を文章の中に取り入れることは戦略として用いられているのではないかと考える。本発表では、1960年代後半の『メンズクラブ』の記事やショートストーリーを取り上げ、当時の「男らしさ」が当誌においてどのように語られ、構築されていたのかを考察する。

◎王温懿（名古屋大学大学院）

『愛のコリーダ』による「民主」と「女性解放」——1970年代のポルノグラフィ映画とポリティクス

1990年代以降、日本映画史研究では、60年代・70年代のポルノグラフィ映画が注目を集めてきている。それは、当時のポルノグラフィ映画が「政治の季節」におけるポリティクスの重層性を検証するのに適したテキストとして見なされるようになったからである。ハードコアな性的表象を特徴づける『愛のコリーダ』もまた、そうした研究でその歴史的意義が議論されつつある。本発表では、『愛のコリーダ』猥褻裁判を端緒として、「民主」を求める議論の言説化と理論化が促されたその歴史的経緯を議論する。さらに、フェミニストの小沢遼子による法廷証言を手掛かりに、「女性解放」を訴える彼女の声が裁判内外の男性中心の「民主」の政治的風潮と接触した結果、『愛のコリーダ』の女性による受容が促進されたことを論じる。

1930年前後の文化生産とジェンダー

1930年前後は、戦間期に湧出した多様な文化が混沌として交錯した時期である。エロ・グロ・ナンセンスの昭和モダニズムの一方には、左翼思想の風が激しく吹き、大正期のリベラルな思想がその渦の中で解体され再構成されている。

この時期の文化に関する従来の研究は、主として男性の知識人や表現者を対象としており、女性に関心が向けられた場合も「モダンガール」などの語られた女性像について論じられてきた。本シンポジウムでは、これまで明らかにされてこなかった文化を生産する側の女性たちの動向に光を当てる。1930年前後、女性知識人や女性表現者は、何を語り、どのように生きたのか。

議論の起点として、『女人芸術』という雑誌に注目する。『女人芸術』(1928-1932)は、当時の女性知識人や表現者が集結した雑誌である、大正期のリベラル・フェミニストや左翼女性知識人、またモダニズム系の作家など、集まった女性たちの立場は実に多様であった。とくに、左翼思想の高まりは女性の中の階級による差異を浮き立たせており、大正期とは違って、「女性」というカテゴリー内の分裂が問題化されている。『女人芸術』を起点としつつ同時代の文化事象に議論を開き、「女性」カテゴリーの複数性と、その競合性について検討する。

セッション1

マルクス主義におけるジェンダー表象

◎呉佩珍（台湾政治大学）

女性解放と恋愛至上主義とのあいだ——大正、昭和期におけるコロンタイ言説の受容

一九二〇年代初期以後、ロシア女性社会運動家アレクサンドラ・コロンタイ(Alexandra Mikhaylovna Kollontai, 1872-1952)の著作は、日本に大量に翻訳、紹介された。それは、大きく二種類に分けることができる。一つは、婦人解放論に関するものである。もう一つは、その恋愛小説である。だが、当時におけるコロンタイを受容する言説には、矛盾しあい、そして分裂している現象が見てとれる。このような現象は、左翼思潮と大衆による両極端のコロンタイの受容、特にそのジェンダー言説から、生じたものと思われる。この両極端の現象は、コロンタイの女性解放論と恋愛言説の受容、そしてのちにそれぞれの言説が日本で土着化してゆく過程と深く関わっている。

本発表の目的は、コロンタイが日本に翻訳、紹介されたのち、一九二〇年代から三〇年代にかけての女性解放論と恋愛言説にどのような影響と変化をもたらしたかを検証する。もう一つの目的は、コロンタイの女性解放論と恋愛小説のメカニズムが、大正、昭和期の文芸思潮にどのように働いていたかを検証することにある。

◎中谷いずみ（奈良教育大学）

階級闘争と女性解放の夢

本発表では、1930年前後の社会主義運動が含み得たかもしれない女性解放の可能性を追いつつ、実際の運動におけるジェンダー配置と女性表象について考えたい。

労働争議における女性工場労働者の活躍など、当時、無産階級解放のための運動は広く女性解放を包含する可能性を見せていた。しかしこの時期につくられた婦人団体は、分裂する無産政党の影響下でふりまわされることとなった。また、非法法下の日本共産党の運動に加わった女性たちは、男性幹部の主婦役、いわば「ハウス・キーパー」を担わされ、検挙の際にはメディア上で誘惑する主体／誘惑される対象として、スキャンダラスに消費されたのである。

この時期の女性たちが階級闘争に見たであろう解放の夢と、性的対象として女性を消費する運動のあり方やメディア言説について考えてみたい。

◎李惠鈴（成均館大学）

社会主義運動とモダンガール——韓国近代長編小説の様式におけるある秘密

本発表は、1930年代において、本格的に創作された近代長編小説が、社会主義者とその運動、それをめぐる社会的な関係の成立と解体を再現することによって形成されたことについて論じるためのものである。

特に、この時期は、男性知識人が中心になっていた朝鮮共産党運動が、日本の弾圧によって壊滅され、京成(ソウル)を中心とする都市消費文化が、新聞・雑誌などのメディアを媒介に消費されていた時点でもあった。アレクサンドラ・コロタイ「赤い恋愛」もやはりこの時期に出現する。

このような政治的、社会文化的な状況と連動する形で、物語のなかの社会運動の実質的な主体は、社会主義者の恋人であった新女性あるいはモダンガールの形象を帯びることになる。彼女らは、社会的な上層と下層の間を移動したり、それに接する存在として描かれているために、近代の長編小説の様式が要求する社会の全体像を再現可能な要素として機能していた。しかも、誰一人転向者として描かれなかった点において、男性の転向社会主義者を批判する機能も担っていたのである。

セッション2

交渉する表現主体とジェンダー

◎笹尾佳代(神戸女学院大学)

『女人芸術』の新人作家——社会運動と〈文学〉の交渉

「女性すべて」に開かれた場であることを目指した長谷川時雨の編集方針によって、『女人芸術』からは、多様な新人作家が登場した。一方で、創刊当初から左傾化に向かう議論は行われており、同時代批評のさまざまなまなざしも向けられている。『女人芸術』から創作をスタートさせ、発表の場を求めた新人作家たちの作品には、このような場の力学との交渉の軌跡を認めることができる。これらの中から、社会運動の周縁のあり方を窺わせるものや、多様な関わり方を浮かび上がらせるものを取り上げ、『女人芸術』という場がどのような文学作品を生み出していたのか、その特徴について考察したい。

◎星野幸代(名古屋大学)

“閨秀作家” 凌叔華の1930年代

作家・凌叔華(1890—1991)は、1920年代に良家の女性や女学生を主人公として、日常生活の細部を通して心理の機微を描いて評価された。しかし左翼作家が主流となる1930年代にはブルジョア作家であると否定的な評価を受け、建国後の中国文学史では長らくその活動は抹消されてきた。彼女と日本との縁は浅からず、少女期に神戸中華学校で学び、20年代には谷崎潤一郎と会談している。一方で、凌叔華は1935—1936年、武漢大学に赴任したジュリアン・ベル(ヴァージニア・ウルフの甥)のオリエンタリズム的な欲望の対象になったことでも知られ、それをきっかけにウルフと文通しながら半生記を執筆した。本発表は抗日の機運が高まる中国において、凌叔華がどのように創作を模索したか、当時の中国と英国、日本との関係および武漢という国民党統治区の状態を踏まえて考察する。

◎木下千花(京都大学)

1930年代前半の日本映画産業における女性パイオニアの可能性——入江たか子のスター・プロダクション再考

入江たか子(1911—1995)は日本映画の第1次黄金時代である1920年代終わりから1930年代にかけて最も人気のある女優として君臨した。しかし、1932年に日活を退社し、兄である東坊城恭長らとともに映画製作会社「入江ぶろだくしょん」を設立し、新興キネマやPCLなどと提携しつつ、1937年までの五年間、独立プロダクションを率いた彼女が、女性プロデューサーの草分けとして認識されることはなかった。本発表では、極めて男性中心的な日本の映画産業および批評言説の権力構造を常に念頭に置きつつ、プロダクションについてのメディアや女性を中心としたファンの言説を分析し、女優としてのみ語られてきた入江を「女性パイオニア」として取り上げる可能性を検討する。

セッション3

女性知識人の1930年前後

◎飯田祐子(名古屋大学)

「女性」の分裂と集合をめぐる闘争

大正期におけるリベラルなフェミニズムの功績は、「女性」という主語で語ることを可能にした点にある。

しかしながら1930年前後、「女性」というカテゴリーは、「階級」という視点を通して分裂する。本発表では、政治理念の対立として捉えられてきたアナボル論争を、「女性」というカテゴリーをめぐる分裂と凝集をめぐる闘争として読み直したい。具体的には、「ボル」の山川菊枝と「アナ」の高群逸枝の間の議論、また『女人芸術』で繰り広げられたアナボル論争に注目し、運動の論理とジェンダーとの関係について検討する。

◎サラ・フレデリック（ボストン大学）

『女人芸術』のインターセクショナリティ——階級、エスニシティ、性、意識と『女人芸術』のフェミニズム

『女人芸術』をインターセクショナリティ（Intersectionality）という枠組みの中で再考する。「インターセクショナリティ」とはジェンダー、階級、人種など差別の「同時交差性」を強調する概念で、アメリカの政治環境についての分析の産物だが、『女人芸術』の創作者は同様の課題に取り組んでいた。その交差性意識が、雑誌の記述に利用されているフェミニズム、マルクス主義、アナキズム主義などの理論の限界を広げていることを明らかにする。